

All is inside the binding



木緒なち

イラスト / 三嶋くろね

Presented by Nachi Kio
Illustration / Kurone Mishima

※すべては装丁内※

All is inside the binding

木緒なち イラスト/三嶋くろね



CONTENTS

003 プロローグ

013
第1章 最低最悪のデザイナー!

067
第2章 それでも仕事がしたいんです

133
第3章 信じてもいいんですか?

191
第4章 すべては本の中にある

219
第5章 わたし、あきらめません

241 エピローグ



すべては 装丁内

All is inside the binding
Characters



目次

[プロローグ](#)

[第1章 最低最悪のデザイナー！](#)

[第2章 それでも仕事がしたいんです](#)

[第3章 信じてもいいんですか？](#)

[第4章 すべては本の中にある](#)

[第5章 わたし、あきらめません](#)

[エピローグ](#)

≪すべては装丁内≫

All is inside the binding

木緒なち

市ヶ谷駅いちがやから徒歩5分のところにある、大きな神社の側そばの15階建て
オフィスビル。その7階からは大きな桜の木が見えた。4月に入って
すぐ満開の花を咲かせたと思えば、1週間も経たないうちに、まるで
生き急ぐように緑の葉へと変わりつつあった。
そういや、今年はお花見にも行けてないな。視界の端に舞い散る花
びらを捉えながら、わたしは目の前の女の子に話しかけた。
「決心……してくれましたか……？」
女の子はテーブルの上に置いた手を固く握りしめた。
黒縁の大きな眼鏡の奥にある目をパチパチと瞬しばたかせ、口の端をキ
ュッと引き締めた。
「最初に会ってからもう3ヶ月……になりますね。えーと、わたしの
気持ちは最初からずっと変わっていません。その上で、あなたの気持
ちを改めて聞かせてほしいんです」
いたく緊張しているようだった。彼女に初めて会ったときから、そ
の様子はずっと変わることがなかった。



他人に対して壁を作り、そう簡単には本心を覗かせない。かたくなに自分と他人との区分けをする、そういう内面をあらわにしている子だった。

「あの……やっぱり、わたしは、その……」

やっとのことで開かれた彼女の口からは、拒絶の言葉が出ようとしていた。

「こういうことって、すごく大変だと思うんです……。理解も得られないし、いろんな人を敵にしそうで、こわくて……」

それでも、まだ最初の頃に比べれば少しはマシな対応になったのだ。最初は目も合わせてもらえず口もきいてもらえず、名乗ることすらできなかったのだ。

押してうまくいく保証なんかないけれど、それでもわたしは、

「こわい気持ち、わかりますっ、で、でもですね」

彼女の目をまっすぐ見て、

「最初はそうかもしれませんが、次第にわかり合っていけると思うん

です……！」

さらに顔を近づける。

「だから、わたしはなんとしてでも」

そして、訴えかけるように、

「あなたと添いとげたいんです……っ！」

「そ、添いとげ……？」

彼女が椅子ごと後ろに退いた。表情が明らかにこわがっている。

「あ……ごめんなさい、つい」

いったん身体を戻して、コホンとひとつ咳払いをする。

「あなたの気持ちを、求めている子たちがたくさんいるんです」

もう一度しっかり目を見て、言う。

「あなたの言葉を、本にしたいんです……っ！」

「……！」

今度は退くことなく、わたしの視線を受け止めてくれた。

彼女は今、同世代の女の子たちからおそらくもつとも共感を寄せら

れている子だった。SNSを通じて少しずつ生み出された彼女の言葉は、多くの賛同と反響を呼び込んで、最初の半年ばかりで10万以上のフォロワーが付き、気がつけば、ネットのアイコンのひとりになってしまった。あつという間に彼女を中心とした大きな渦ができていくのを、わたしは驚きながら見ていた。その渦は今もまだ大きくなり続けている。

しかし彼女は、いくら自分の人気が高まろうと、自らの立ち位置を変えることは一切しなかった。変に自分を露出しようとはせず……つまり、自撮りの写真をアップしたり、年齢や所在地のヒントになるようなことをつぶやいたり、メディアの取材に応えたり、そういうことは何ひとつしようとしなかったのだ。

そんな彼女——伊吹由里子のつむいだ、虚飾のない等身大の言葉の数々。わたしはそれを一冊の本にまとめようとして、この3ヶ月の間ずっと交渉を続けていた。

「でも、わたしなんかの言葉を……待ってる人なんか本当にいるんで

しょうか？」

由里子さんは不安そうな表情を向ける。

「もちろんいますよ！ その、わたしには……わかるもの」

わたしは力強くうなずいた。彼女の言葉には明らかな力があつた。それはもちろん、フォロワー数やRT数といったわかりやすい数字もあつたけれど、そんなものは営業に見せる資料に書いてあればいいことで、本当のところはどうでもよかった。

「わたしね。高校生のとき……何事においても空っぽな子だったんです」

学校の成績も普通で、特技も特徴もないつまらない女の子。それがわたしだった。友達も少なく、いつも漠然とした不安に覆われていて、毎日が本当につまらなかった。

「だけど、高3のときに、一冊の本に出会ったんです。自分とそう変わらない年代の、女の子の書いた詩集だったんですけど、すごく、その本に救われて——。本には人を救う力があります。誰かも、きっと

由里子さんの言葉で救われるはずです」

伊吹由里子の言葉には、同世代の女の子を救ってくれる力があると感じていた。だから、本にすることでもっともっと、多くの女の子へと届けたかった。

わたしみたいな、空っぽな女の子の中をやさしく埋めてくれるような。そんな本を作りたかった。そう考えて、出版社を志望したから――。

熱意をもって、彼女を説得した。

それから、1時間ぐらいが経っただろうか。

「わかりました」

軽くうなずいて、

「本……出してみようと思います。よろしくお願いします」

彼女は出版を承諾する旨を伝えてくれたのだった。

「あ……」

わたしは一瞬、言葉に詰まった後に、

「ありがとうございます！」

由里子さんがちよつと引くぐらいの大きな声で、お礼を言った。

「えっと、それでは……発売日をいつにするかなんですけど」

手帳を開き、スケジュールを確認する。

すでに原稿の元となる文章はある。改稿の相談や書き下ろしの有無はともかくとしても、早めに出すことについてデメリットは少ない。なるべくならば秋には出したいところだ。そうすると、逆算して夏のはじめには入稿を済ませたいし、各所への手配はそこから3ヶ月前となると……。

「あ、あの……」

手帳を前に考え込んでいたわたしへ、すごく申し訳なさそうに、彼女が口を開いた。

「その、ひとつだけ、条件を付けてもいいでしょうか……？」

わたしは、すぐに大きくうなずいていた。

「ええ、もちろんですっ！ 何でも言うてください！」

それこそ、胸をドンと叩くぐらゐの勢いだつた。



1ヶ月後。

わたしは広尾のアトリエに来ていた。

壁は一面ガラス張りで、真っ白な天井と床が印象的な建物には、数々のアニメ作品や映画などのイラストが額装で飾られていた。

その中央のテーブルに、わたしは、とある先生と向かい合つて座つていた。

「ご依頼、拝見しました。この作品のイラストを私に……とのことですね」

黒のワンピースに豪華なネックレス。指輪のダイヤの大きさは、どう見てもカラット数がおかしいレベル。

「は、はいつ、著者たつてのお願いでして……」

伊吹由里子が望んだのは、ある著名なイラストレーターに装画を描いて欲しいということだつた。大概のことなら引き受けるつもりで「何でも」と言つたわたしでも、正直想定外だと思つたほどの、いわゆる大御所だつた。

極めて多忙で、依頼したければタイムマシンで10年前に飛ぶ必要があるとまで言われている人で、しかも合間を縫つてスケジュールを確保できたとしても、依頼内容が意に染まないときっぱり断られるとか。よかれ悪しかれいろいろな評判が聞こえてくる。

それでも思い切つて依頼をした。先生はSNSもしていなければ、メールアドレスも公開していなかつた。依頼のすべてはマネージャーさんが管理しており、そのマネージャーさんへの連絡も、各出版社の編集長クラスしか許されていなかった。

わたしも自分の編集長を説得して連絡を取ってもらい、電話でマネージャーさんになぜイラストが必要なかを必死に説明した。当初はスケジュール上の理由ですげなく断られた。だけど、一度でもいいか

ら先生と話をさせてくださいと食い下がった結果、どうにか直接の面談と企画の説明をする機会までこぎ着けた。

今考えれば、ちょっと強引すぎたと思わなくもない。受話器の向こうで「来るだけ来てみますか?」と言ったマネージャーさんの、苦々しそうな声だったらなかった。

結果として、先生を前にして緊張の極致を味わったわたしだったけれど、なんとか本の趣旨を説明することはできた。

あとは沙汰を待つのみ。

と言っても、マネージャーさんの応対を考える限り、やっぱり敗色は濃厚かな……。

(ダメと言われても仕方がない……ダメと言われても仕方がない……)

ダメだったときのショックを和らげるためにも、そんな言葉を脳内で繰り返していたほどだった。

「いいでしょう、お受けします」

だから。

先生のその言葉を聞いたとき、自分の耳が信じられなかった。

「あ……ありがとうございますっ!!」

椅子から立ち上がって、地面にめり込むかと思うほどの礼をした。

よかった。これで彼女との約束も果たせるし、この先生のイラストなら、それだけで十分すぎるぐらい話題になってくれるはず。

編集としての実務はもちろんこれからだけど、もう勝ったも同然。

万事がうまくいく、そう思っていた。

「そうそう。ひとつ、受けるための条件があるのだけれど、いいでしょうか?」

先生が静かに口を開いた。

……あれ、このパターンちょっと前にもあったような?

「は、はいっ! 何なりとお申し付けくださいませっ!」

結果として、今回も、やっぱり難題を抱えこむことになってしまった。

「実家なあ……帰ってる時間があったら、休みにあてたいなあ」
まともな時間に寝たためしがないから、起きる時間も当然まともじやなくて、冷水でなんとか正気を取り戻すのが日常になっていた。
「まっぶし」
よろよろと洗面所へ歩いて行って、ひとまずバシバシと顔を洗って目を覚ます。

あくび混じりのまままでカーテンを開けると、目を射るような光が部屋に飛び込んでくる。

電話を切って、クッションの上に放り投げる。外はもう熱気が満ちているみたいで、かろうじて午前中なのに部屋の中まで暑さが押し寄せていた。
「あくび混じりのまままでカーテンを開けると、目を射るような光が部屋に飛び込んでくる。」

「もしもしーあーお母さん、うん、だいじょうぶ……。家にはちゃんと帰ってるし寝てもいるから。ごはん？ わたしが食べないで平気なわけないじゃん、しっかり人並みに食べてるってば、来月には帰るかー、うん。じゃあね」

CMYK
青幅(データサイズ)11.5mm
赤幅(データサイズ)11.5mm
緑幅(データサイズ)11.5mm
黒幅(データサイズ)11.5mm
白幅(データサイズ)11.5mm
※バーコード未差し替

P 013

第1章

最低最悪のデザイナー！

トリミング要る確言

カレンダーアプリを眺めつつ、7月の連休あたりを確認する。予定の入っていることを示すマークがすでにあちこちにある。この調子でいくと、まともな休暇にはなりそうもなかった。

着替えながら、冷蔵庫に常備している牛乳を一気に飲み干す。トースト2枚と目玉焼きとベーコン、買い置きサラダとコンソースープをテーブルの上に用意すると、テレビの昼の情報番組の占いコーナーを見て、今日の運勢を確認する。

「あー、魚座今日最悪じゃん……」

別にオカルト好きでもないけど、なんとなく占いは見てしまう。いい内容はさっぱり当たらないけれど、悪いことはそこそこ当たる気がする。ちよつとだけ注意するようにしている。

「金運、仕事運、いずれもどん底、いい出会いがありそうなので、そこを突破口に……って、かえってダメなんじゃないの、そんなときに出会ったら」

トーストをもぐもぐしながら、運勢最悪のときの運命的な出会いについて考える。

水たまりで転んで泥まみれになったわたしを颯爽と抱き上げてくれる人？

踏んづけたガムを持ち合わせたヘアスプレーでさっと取り除いてくれる人？

もっとストレートに、しつっこい痴漢を撃退してくれる人？
すべてに首を振って否定する。そういうケースで、わたしはいつも悪い方悪い方に流されると決まっているのだから。

「この呪われし名前に生まれた瞬間から、運命は決まっていたのだよ」

演技めいた言葉と共に残りの食べ物をグイッと飲みこむと、わたしはセールで買ったベージュの地味スーツをまとい、力を込めて腰をバシーンと叩いた。

「おっしや、今日も一日がんばるぞお、カノコお！」

……最近、妙に独り言が多くなった気がする。



わたしの名前は甲府^{こうふ}可能子^{かのこ}という。

名字が名字だけに山梨^{やまなし}の生まれと誤解されやすいけど、残念ながら神奈川^{かながわ}県の秦野^{はだの}だ。たばこ祭りと吉田^{よしだ}栄作^{えいさく}の出身地という以外にはあまり特色のない土地で、横浜^{よこはま}と湘南^{しやうなん}しか知らないという人には、神奈川県^{しんえんけん}のどこにあるのかを説明するのも難しい。

とりあえず山。ざっくり都会が神奈川の東側にあるとすれば、西側の秦野には山ばかりある。あと、やたら工場がある。都心にそこそこ近いのと東名高速が走っている関係で、大企業の工場がボコボコ建っている。

つまるところ、けっこうな田舎だった。

そんな場所だから、遊ぶといえはアウトドアが中心。そういえば聞こえがいいけど実際は野山をかけめぐる系。子どもの頃は、とにかく

辺りを走り回っていた記憶しかない。

高校になると、陸上部に入った。学校の成績も、そして高校のランクも中の中ぐらい。となると、何かで目立とうとすれば野山でつちかった体力しかない。そう思っの判断だった。ここでわたしは、2年間ただひたすらに走りまわった。

だけど、こういう世界には明確な才能の差というものがあつた。高2のときに初めて出場したインターハイの地区予選で笑ってしまうぐらい見事に負けた。小中学校のときはぶっちぎりで誰もいないゴールに駆けこんでいたのに、いつしか他人の背中だけを見るようになっていた。当然ながら、陸上での進学なんてまったく考えられない成績に終わった。

振り返ってみたら、わたしには他に何もなかった。他人よりも体力と根性があるぐらいで、資格も、才能も、打ちこんだ趣味さえもなかった。

だから、あの運命の一冊に出会ったことは、人生における一大イベ

ントだったのだ。

高3の夏。ぎりぎり落ちこぼれてないくらいのわたしの成績でもなんとか引っかかるレベルの中堅大学を目標に、受験勉強をしていた時期だった。先生からはもう少しがんばれとも言われていたけれど、やりたいことがあったわけでもなく、熱意を持つのは無理な話で、当然ながら集中力を欠いていた。

何でもできるかのような可能子^{かのこ}という名前を付けた親をちよっと恨んだりもした。

その日は図書館に勉強に来ていた。家では弟がうるさかったし、教室では苦手な子たちのグループがいて、そこがいちばん落ち着ける場所だった。

いつもの窓際の席に座ると、机の上に置きっ放しになっている本があるのに気づいた。無視してもよかったけど、何かが癪^{かん}にさわった。ちゃんと返却しておきなよ……そんな文句を言いながら本を手にとった。

た。

加々見唯^{かみゆい}。聞いたことのない作者だった。紹介文には、等身大の少女が言葉をつむいだ初めての詩集、と書いてあった。表紙には真っ白な背景にやさしいタッチのイラストが描かれていて、読みやすい、丸っこい書体でタイトルが記されていた。

詩集なんて手に取ったこともなかった。詩なんて国語の授業でたまに出てくるものという認識しかなかったけれど、かわいらしい表紙のせいか、わたしは初めて、詩集というもののページをめくった。

そこからは速かった。本当に速かった。

10分もすると、目の前が涙でにじんできた。書かれていたことはすべてわたしのことだった。誰にも知られず、誰にも興味を持たず、ずっと独りきりだと思っていたさみしい人生を、それでも肯定して包み込んでくれる、そんな内容だった。

著者の生年月日を見ると、自分と2歳しか違わなかった。ということとは、2年前は同じ高校生だったということになる。この世界で、少

なくともこの著者とわたしは同じ思いを共有していたんだ。その事実が、たまらなくうれしかった。

わたしはそのまま、本を抱きしめて泣き続けていた。周りの子たちの視線も感じていたけれど、この本に出会えた喜びに比べたら、ささいなことだった。

勉強なんかしている場合じゃなかった。名残惜しくも本棚に戻して、急いで近所の本屋さんに行き、その詩集を買った。自分の部屋で、もう一度穴が空くほどにしつかりと読んだ。どうしてこの子はこんなふうに自分のことを文章にできるんだろう。すごい。本当にすごい。

そして、そのあとがきでひとつのことを知った。

「この本で、みなさんと会う機会をくださった編集さんに心から感謝します」

そうか、本っているんな人が関わってできているんだ。

本って素敵だ。ずっとかたくなだったわたしを、この一瞬で溶かし

てしまった。これは魔法だ。現代に生きる魔法だ。そして本に関わるすべての人たちは、きつと素敵な魔法使いなんだ。

「わたしも……なれるのかな」

魔法にあこがれる少女は、自らも魔法使いになりたいと願う。わたしがまさにそうだった。わたしにはこの人のように文章を書くことはできない。それはまぎれもない才能だろう。でも、本を作る人に、魔法を使う人にはなれるかもしれない。そして、いつか自分も、こういう素敵な出会いを作れる人になりたい。

17年のあいだ、まったく決まることのなかった、甲府^{こうふ}可能子^{かのこ}の将来の夢が、このとき見事に決まったのだった。

わたし、編集者になる。そして、素敵な本を作るんだ——！



「はい、あの……それで、メールした件なんですが……あ、はい、そ